少年少女絵物語

沢野ひとしの

少年少女絵物語

沢野ひとしの

本の雑誌社

沢野ひとしの少年少女絵物語

一九八六年九月二十日初版第一刷発行
一九九〇年四月十日初版第四刷発行

著　者　沢野ひとし
発行人　目黒考二
印　刷　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社本の雑誌社
〒160　東京都新宿区新宿一―十七―一　LAND・DEN3F
電話　〇三（三五二一）五二九一　振替東京五―五〇三七八
©1986 Hitoshi Sawano. Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります

沢野ひとしの少年少女絵物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

少年少女絵物語

神田川　8
洞穴探険　16
原っぱ　20
お化け屋敷　24
菖蒲湯　28
ザリガニ釣り　32
きもだめし　36

夏風邪　40

夏の終り

羽田空港　46

白いランドセル　63

六月の鳩　75

自動皿洗い機　97

文化祭　111

地下室　125

ヒマワリの種　137

家　148

家族

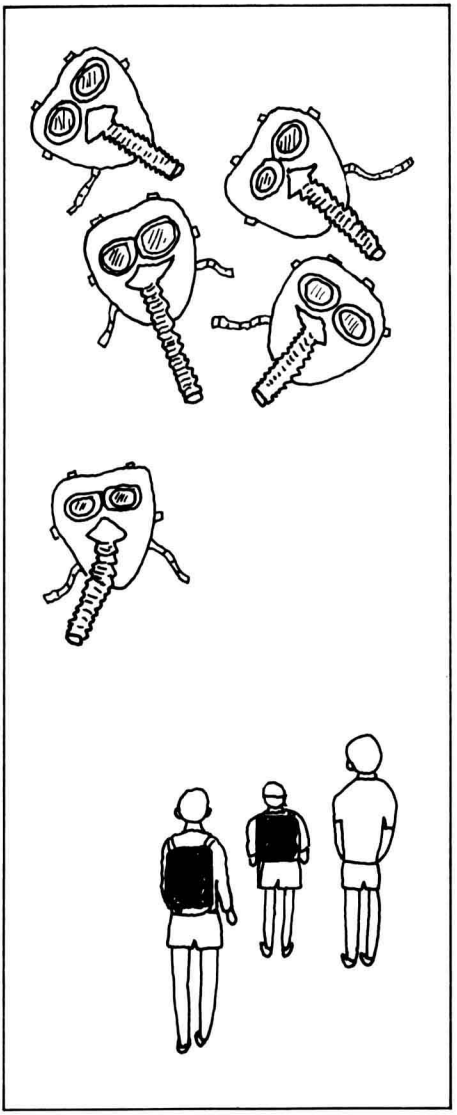
母の死 170
姉の結婚 176
父親 182
七国山探険記 188
少女 195
中学一年生 201
少年 207
クワガタの夏 213
あとがき 220

装丁　菊地信義

少年少女絵物語

僕が小学校の頃の遊び場所は、東中野にあったモナミという西洋料理店の裏庭であった。モナミはその当時活躍していた文化人のたまり場で、とりわけ作家、編集者たちが出版パーティーなどで利用していて、人気のあった店である。店の中は落ち着いた油絵が飾られ、窓には白いレースのかかった上品な雰囲気の店であった。そのモナミでコックをしている人の子供の小田切君とクラスが同じだったために、僕は年中モナミの裏庭で遊んでいた。

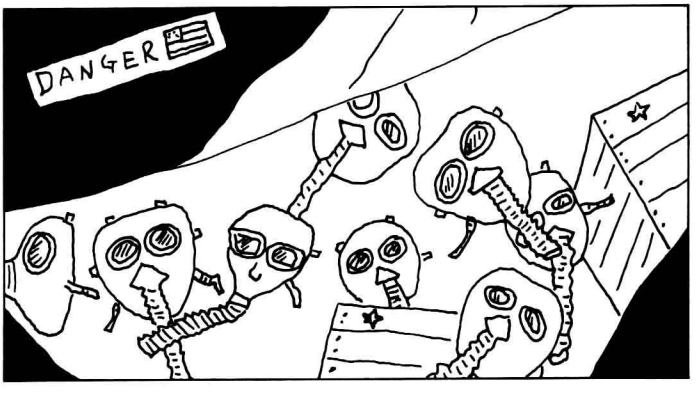
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c



ある日その裏庭のとなりにアメリカ軍が使った軍用品が大量に隠されているという噂が耳に入った。厳重な柵が設けられ、中をのぞくこともできなかった。柵には危険と大書きされた札がかかっていたが、僕と小田切君は庭の木に登り、その柵の中をのぞいた。「アッ、毒ガス用のマスクがたくさんある」「本当！」僕は小田切君がのぞいている位置まですぐに登りたかった。

「どんなマスク？」「黒いゴムでできたマスクだ。あれは戦争の時にかぶる毒ガス用のマスクだ」

あわてて小田切君と同じ所まで登ると、そのアメリカ軍の軍用品がやっと眼に入った。黒いゴムでできたマスクには口の部分に伸び縮みする太い管がついており、それが何百個も雑然とつまれていた。それに飛行機に使用したと思われるキラキラと光る計器類が山づみされていた。カーキ色のシートがかぶさった下にはなにが隠されているのだろう。僕と小田切君は興奮して木の上から英字がペイントしてあるシートに見とれていた。英語がわからない僕らはその下にもしかすると機関銃などが隠されているのではないかと大袈裟に空想していた。そしてこんな

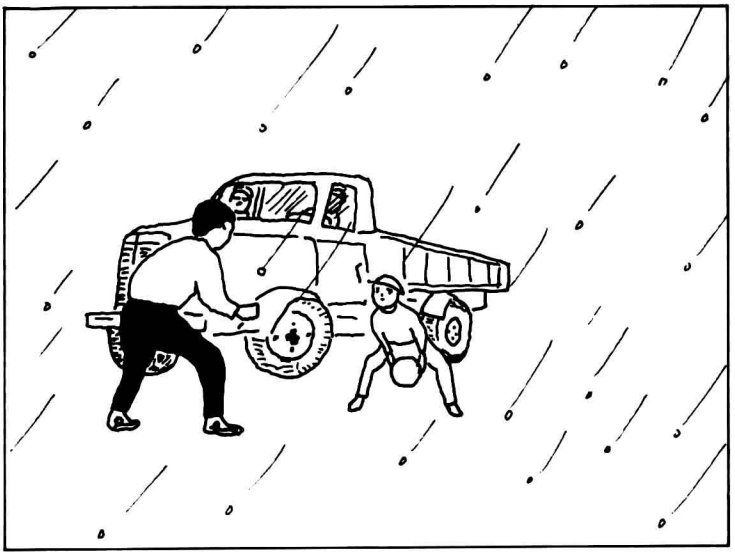


ものがモナミの裏庭のとなりになぜ置いてあるのかもナゾめいていて、木から降りても、いまはじめて見たその物にボーッとしていた。

「あれを盗みだそう」と僕はいった。

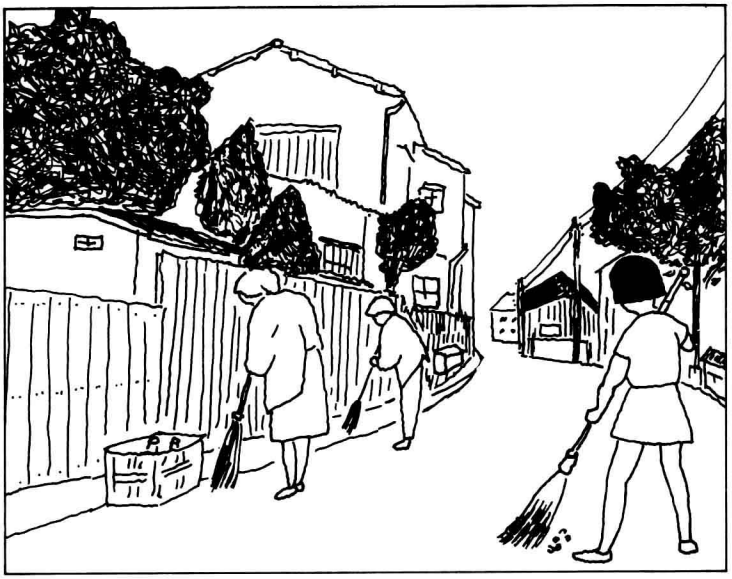
大人の背丈ほどもある塀を乗り越えて入るのは容易なことではなかったし、ピッタリ組み合わさった鉄板の上を越えることができても今度は外に出られない。中にはふみ台になるような物がなかった。

「なにがあってもあのマスクを盗みたい」と僕はいった。「あのシートを開いてみたい」と小田切君がいった。



その頃、僕らは神田川を越えたとなり町の悪連中とたびたびケンカをくりかえしていた。戦いの場所はいつも神田川の堤か日本閣のまわりである。竹ざおを持った中学生が先頭に立ち、小学生はうしろから石を投げつける役をしていた。恰好だけはすごいのだが「ワーワー」声をあげるだけで、たいした戦いではなかった。しかし、石があたって血を流している者もいた。二カ月に一回ぐらいあるケンカに町中の体の大きい小学生は声をかけられ召集される。気の弱い僕は前線から離れ仲間達の戦いぶりを一人後方から眺めるのだった。

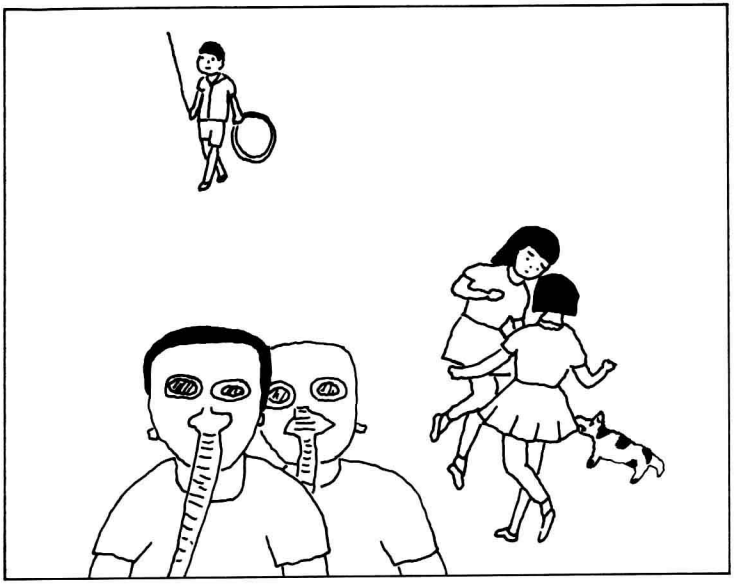
僕には時々くりかえされるこのケンカの深い理由はよくわからなかった。子供達のケンカなど実にたあいのないことが原因である。たとえばとなりの町に遊びに行った帰りにからかわれたとか、夜店で足をケトばされたとかいうようなことだろう。けれども竹ざおや石を手に何十人も神田川の橋を前に立ちふさがると、それはかなり迫力のあるシーンだった。



僕と小田切君はそのケンカのために、ぜひとも毒ガス用のマスクをかぶりたかった。これをかぶると、石があたっても平気なように思えたし、敵はなにごとかとビックリして逃げていくだろう。僕はなんとしても手に入れたかった。

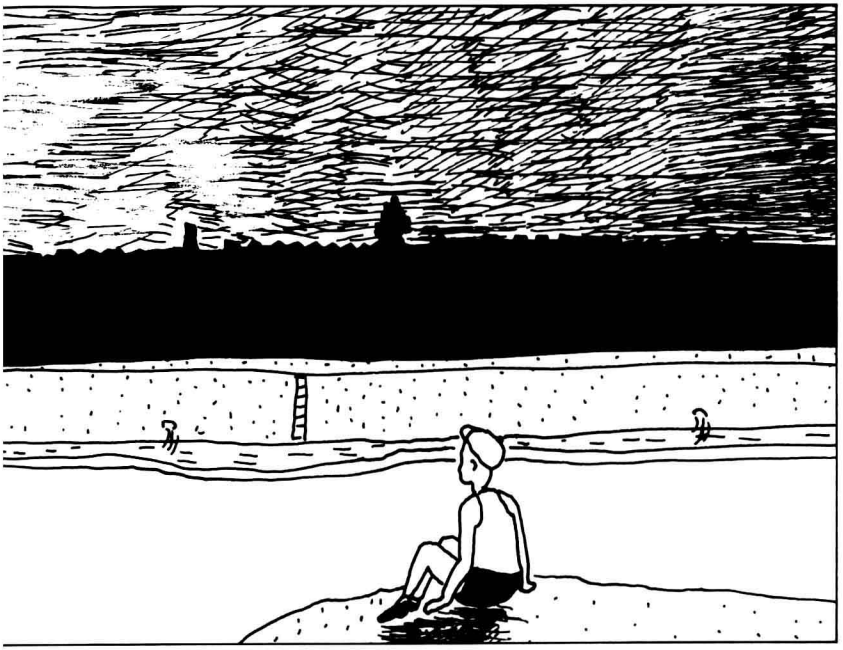
「木の上からつりざおのようにして針金に引っかけて上げれば」小田切君の考えどおり二人は竹ざおにタコ糸を下げ、針を降ろしてみた。しかし何回やってもマスクにはひっかかるのだが上には上がってこなかった。まだ持ち上げる力がなかったのかもしれない。

僕は中学生の先輩にフロ屋で会った時に、この毒マスクのことを口にした。声がわりした先輩はフロ屋の体重計に乗りながら「なに、毒マスク」と興味のありそうな返事をした。僕と小田切君と先輩は次の日、木の上からいくつものコブをつけたロープをたらし、ついにあこがれの毒マスクを手にすることができた。



さっそくそれをかぶってみると、まるで戦場に立つ兵士のように気持がピンとはるのだった。マスクのレンズを通して見る先輩や小田切君はユラユラとスローモーションフィルムのように揺れていた。ただ僕らをがっかりさせたのはカーキ色のシートの下に隠されたものだった。シートをめくってみると、そこにも毒マスク用の木箱があったのだが、中身はなにも入っていないただの空箱であった。

「これをかぶればあいつらに負けない」先輩はさっそくケンカの作戦をたてた。全員が毒マスクをかぶる作戦だった。うしろにいる小学生たちが袋にこの毒マスクを隠し、いつもの戦いの橋にさしかかったら、全員でマスクをかぶって、いっきに敵地に乗り込み、逃げおくれた者を捕虜にするのである。



僕は家から古い布でできたザックを持ちだし、その中にマスクを入るだけいれた。小田切君の家の小屋が作戦本部であった。先輩は「俺がかついでいく」と重そうなザックを肩に背負い、集合場所の日本閣の丘の上までかついでいった。仲間は三十人は集まり、もうすでに投げつけるためのドロのダンゴや竹ざおを用意していた。そんな連中に毒マスクを見せると「オーッ」といっせいに騒ぎ「オレにかせ」とひったくるようにしてかぶった。そんな風景を見ると僕と小田切君はひどく満足し「まだいっぱいあるんだよね」と明るい声を出した。

僕らの仲間が神田川に近づくと、すでに偵察に来ていた敵が「来たぞう」と大きな声を出し、僕らと同じようにして作った土のダンゴが早くも川越しにとんできた。「よーし、いまかぶるぜ」中学生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c